

扉ページの写真：日本の収容所における捕虜仲間と（中央後ろから2列目がトルンペルドール）

序文　——この本はユダヤ魂、日本魂を教えてくれる

衆議院議員 西村眞悟

日露戦争を見つめれば見つめるほど、日本民族とユダヤ民族の、その神話的な默示録的な民族の運命の交叉を感じる。

日露戦争は、単にユーラシア大陸の東端の満州から朝鮮半島に膨張してくる帝政ロシアを、近代化を始めてまだ三十数年しか経っていない極東の日本が打ち破ったという十九世紀末から二十世紀にかけた帝国主義時代の出来事にとどまるものではない。また、一四九八年、バスコ・ダ・ガマがヨーロッパから喜望峰を回つてインドへの航路を開発して以来、五百年に亘つて続けられたヨーロッパの白人によるアジア・アフリカの有色人種支配の終焉の始まりという偉大な世界史的転換に尽きるものでもない。

日露戦争は、神話に発する万世一系の天皇を戴く日本民族が、決死の覚悟で一丸となり、世界第一の陸軍国であるロシアとの国家存亡をかけた死闘に勝利する

なかで、同じく神話を信じることを力の源泉とするユダヤ民族が、祖国を古代ローマに滅ぼされてから二千年ぶりにパレスチナに建設する切っ掛けとなつた戦争である。

そして百八年後の現在、地球上には、神話に淵源することを自覚しそれを民族の力の源とする民族の国家として、極東の日本と中東のイスラエルの二国が存在しているのだ。

あの明治三十七、八年（西暦一九〇四、五年）の日露戦争において、日本軍と満州の戦場で相まみえたロシア軍の中に、それぞれの祖国建設に命をかけた二人の軍人があつた。

一人は、奉天の黃塵の荒野で日本軍と戦つたロシア軍将校であるフィンランド人グスタフ・マンネルハイムであり、一人は遼東半島の旅順要塞に立て籠つて日本軍と戦つたロシア軍将校、ユダヤ人のヨセフ・トルンペルドールである。

グスタフ・マンネルハイムは、日本軍との戦いに接し、小国でも團結すれば大國に勝てると確信し、フィンランド独立の英雄となる。彼は白いマントを着てフィンランド独立のためにロシアと戦つたが故に、現在フィンランドで「白い將軍」

と呼ばれている。

そして、もう一人、旅順要塞に立て籠つて日本の乃木希典大将率いる第三軍と戦つたヨセフ・トルンペルドール。彼こそは、明治三十八年、我が郷里である大阪府の堺・高石に設置された浜寺ロシア兵捕虜収容所に捕虜として収容され、その生活のなかでユダヤ人の国家建設の志を固めたイスラエル建国の英雄である。

彼は旅順要塞攻防戦において日本軍の放つた砲弾によつて左腕を失つた。そして三ヵ月後に病院から退院した彼は、軍当局から除隊と帰還を許された。しかし、彼は最前線に戻ることを希望した。そこで、ロシア軍は彼を下級将校に任命して軍刀と拳銃で戦うことを許した。片腕では、小銃を操作できないからである。ロシア軍ではユダヤ人の将校は異例であったが、ロシア軍は彼の武勇を認め、拳銃と剣で武装できるように彼を将校にしたのである。後にイスラエル建国の英雄となつたヨセフ・トルンペルドールは、イスラエル人から、親しみと畏敬の念を込めて「片腕の英雄」と呼ばれている。

この度、元駐日イスラエル大使であつたエリ・エリヤフ・コーヘン氏が本書「国のために死ぬことはよいことだ」を書かれた。そして本書出版に際し、日新報道

の遠藤留治氏より一文を求められたので、著者エリ・エリヤフ・コーエン大使と遠藤留治氏に感謝しつつ、我が祖国日本とイスラエルへの思いを込めて、この一文を書かしていただく。何故なら、コーエン大使も本書で言われているように、「多くの難題を抱える日本人、特に次代を担う若い方々に、祖国の地を守ることにその生涯を捧げたヨセフ・トルンペルドールの生き様が伝わるならば、これ以上の喜びはない」からである。

然り、イスラエル建国の物語と建国の英雄ヨセフ・トルンペルドールの生き様を知ることは、祖国のために死ぬことを喜びとしてロシア軍と戦い、ヨセフ・トルンペルドールの心に二千年前に奪われたユダヤ人の祖国イスラエル国家建設の火を付けた明治の日本人を知ることである。

トルンペルドールが旅順で遭遇した敵である日本軍兵士は、各国の観戦武官が驚嘆する兵士であった。イギリスをはじめとするヨーロッパ各団は、日本軍の戦い方を模範として十年後の第一次世界大戦を戦つたのである。

彼らが驚嘆した日本軍兵士は、乃木希典第三軍司令官が明治天皇に報告したとおり戦死していった。即ち、乃木將軍は天皇に報告した。

「我が将卒の常に勁敵きょうてきと健闘し、忠勇義烈、死を視ること帰するが如く、弾に斃たおれ剣に殞たおる者、皆、陛下の万歳を歎呼して欣然きようできとして瞑目した」と。

そして、本書にあるとおり、トルンペルドールも日本軍兵士のように死を恐れず微笑みそして瞑目した。

本書の表題である「国のために死ぬことはよいことだ」は、トルンペルドールが、捕虜生活を送った大阪の浜寺口シア兵捕虜収容所で心に刻みつけた言葉であり（一九〇五年）、戦死する直前に戦友に語り（一九二〇年）、そして現在、イスラエル北部の彼が戦死したテル・ハイにある彼の墓標の前に建つライオンの石像に刻まれている。

さて、著者のエリ・エリヤフ・コーエン元駐日大使は、大使の任期の最後の年である平成十九年に私の郷里である堺市と高石市に来られ、堺のホテルに宿泊された。その時私は、日本イスラエル親善協会の神藤耀氏に紹介されてコーエン大使にお会いして共に夕食を頂いた。

コーエン大使の堺・高石訪問の目的は、イスラエル建国の英雄であるトルンペルドールが、建国の志を抱いた「建国の夢の原点」ともいえる浜寺口シア兵捕虜

収容所跡を訪れ、高石市役所内に展示されたトルンペルドールに関する資料を観て、それから収容所内で病気などで亡くなつたユダヤ人九名を含む八十九人のロシア軍兵士の墓がある泉大津にあるお寺に参ることであった。

夕食時、コーヘン大使と私は、もちろん本書にあるトルンペルドールのことを話したが、ここでは、他の印象に残る会話を紹介しておきたい。

コーヘン大使は、ホテルに着く前に、浜寺ロシア兵捕虜収容所から東に三キロほど内陸にある世界最大の前方後円墳である第十六代天皇である仁徳天皇陵を訪れた。その時のことを大使は、「靈氣を感じた」と言つた。

私が、「二神教のユダヤ教徒である大使が、何故、仁徳天皇陵の前で靈氣を感じるのか」と尋ねると、彼は「二神教と八百万の神は同じだ」と答えた。「一つが総て、それが一神教、総てにあるのが八百万です」。彼は三千年のユダヤ教の祭司（コーヘン）の家に生まれた人である。そして、日本の武道を習得し、靖国神社で居合いを奉納したと聞いた。

またコーヘン大使が参った仁徳天皇陵であるが、浜寺のロシア兵捕虜たちは一ヶ月ごとに給金が支給されており外出が許されていた。特に将校は待遇がよかつ

た。附近の民家で接待を受ける捕虜もいた。従つて、日本に対して好奇心旺盛なトルンペルドールは、きっと巨大な天皇陵に興味を示し、ここを訪れていたであろうと思う。

コーヘン大使と別れる前に私が尋ねた。「イスラエルは原子爆弾を持つているはずだ、どうですか」。

彼は答えた。「持っているか持っていないか、答えないのが抑止力です」。

現在、コーヘン大使の訪れた浜寺の西は海が埋め立てられて見渡す限りの臨海工業地帯になつているが、トルンペルドールのいた頃は、西は大阪湾に面する白砂青松の浜が果てしなく続き、東は漁村が点在する風景の向こうに楠木正成ゆかりの重量感のある金剛山を主峰とする山々が遠望できた。私の幼い頃の風景も同じだ。

トルンペルドールは、「凄まじいほどの威厳を放つコーカサスの山々を仰ぎつづ育ってきた」と記しているが、彼はコーカサスの山々を見て育ち、浜寺では西の海と白砂青松の浜そして東の金剛山を眺めてイスラエル建国の志を練り、そしてエレツ・イスラエル（イスラエルの大地）の荒野の開拓に入つていったのだ。

コーケン大使と堺で食事をした三年後の平成二十二年四月十八日、私は、イスラエルのマアレー・アドミームにある大使の自宅を訪問して再会した。

その前日は、テル・ハイにあるトルンペルドールの墓を訪れ、翌日四月十九日の戦没者記念日をエルサレムで迎えてイスラエル国独立六十二年祝賀式典に出席した。

一九四八年五月十四日、初代イスラエル首相ダビット・ベングリオン（ライオンという意味）は、テル・アビブでイスラエル独立を宣言した。その宣言は「エレツ・イスラエルは、ユダヤ民族の誕生の大地であり、ここから民族の精神と信仰と文化が形成された」というユダヤ民族のアイデンティティと大地との不可分性を示す冒頭の一節で始められている。そして、この独立宣言終了と共に、イスラエルからイギリスの信託統治を示すユニオンジャックが降ろされ、次の瞬間、周辺のアラブ諸国がイスラエルに攻め入ってきて第一次中東戦争が始まる。以後、大規模な中東戦争は四度起り、イスラエルは現在まで勝ち抜いてきた。明治の日本人がイスラエル建国の英雄トルンペルドールに示した祖国のために闘闘する精神は、脈々と現在のイスラエルに生き続けてイスラエルを守っている。

それ故、あるヨーロッパ人は次のように言うのである。「二十世紀は、勇敢な戦士であった日本人が卑しい商人になり、卑しい商人であつたユダヤ人が勇敢な戦士になつた世紀である」と。この日本とイスラエルの両民族の分かれ目は、一九四五年の日本の敗戦と一九四八年のイスラエル建国にある。ほぼ同時である。

しかし、我が日本もいよいよ「戦後の太平」を抜けて厳しい荒波の国際環境のなかで、再びまじりを決して国家存続の努力を傾注しなければならない歴史段階に入っている。従つて、我々も再び勇敢な戦士になるために、本書のトルンペルドールとイスラエル建国の精神に学ばねばならない時に至つたと言える。この意味で、エリ・エリヤフ・コーケン元大使の本書は日本の為に貴重な書であり、著者に感謝しなければならない。

ここでまた、我が國とトルンペルドールとイスラエルの奇しき縁を示す一人のイギリス人を紹介したい。彼は、イン・ハミルトンという軍人で、観戦武官として日露戦争に参加し、十年後の第一次世界大戦においてはイギリスのダーダネルス作戦の大将として参戦した。そして、日露戦争においては日本軍を賞賛し、ダーダネルス作戦においてはトルンペルドールが、ローマに滅ぼされてから二千

年ぶりに創設したユダヤ人の軍隊である輸送部隊「シオン・ラバ隊」の最前線での活躍を賞賛しているのだ。

イアン・ハミルトン大将は、日露戦争に於ける日本軍を觀察し、日本から学ぶべきものとして兵士の忠誠心を上げて次のように言つてゐる。「子供達に軍人の理想を教え込まなければならぬ。自分達の祖先の愛国的精神に尊敬と賞賛の念を深く印象づけるよう、愛情、忠誠心、伝統および教育のあらゆる感化力を動員し、次の世代の少年少女たちに働きかけるべきである」（平間洋一著「日露戦争が変えた世界史」）。

そして、十年後、ダーダネルス作戦の大将であるイアン・ハミルトンは、傘下のトルンペルドール率いるシオン・ラバ隊の奮闘を次のように記してゐる。

「彼らは類い希な度胸をしていた。それは塹壕にいる兵士たちの状況を考えると明らかである。何故なら、塹壕にいる兵士たちは戦闘に集中することによつて、自分の身に迫る危険への恐怖を紛らわすことができた。

しかし、シオン・ラバ隊の男たちは砲弾が塹壕で次々と火を噴くなかで自分を支えるだけではなく、砲撃に怯えて動かなくなつてしまつたラバを前に引きずり出

さねばいけなかつた。それは決して容易なことではないのである」（本書）。

このイアン・ハミルトン大将のユダヤ部隊に対する評価は、第一次世界大戦において将来のユダヤ軍の前身になりうる部隊をつくることがユダヤ国家建設の基礎になると確信して、トルンペルドールを、我が意を得たりと腹の底から勇気付け喜ばすものであつたであろう。

イアン・ハミルトン大将は、日露戦争の日本兵の戦いぶりから感化を受けてイギリスの教育を改革してゆく。その結果は、十年後に現れた。即ち、第一次世界大戦においてイギリスのパブリックスクール生徒の死傷率は最高に達した。彼らは、塹壕からラグビー・ボールを蹴つて飛び出し、敵塹壕に突撃していくのである。

イアン・ハミルトン大将は、退役後はエディンバラ大学の名誉総長となる。そして、イギリス国防委員会は、突撃に対する批判が起つてゐる風潮下の一九二〇年において公刊日露戦史を編纂し「この旅順の戦いは英雄的な献身と卓越した勇気の事例として永く語り伝えられるであろう」と書いた。

そこで問うが、戦後の現在の我が国において、日露戦争に於いて、ベトンで覆

われた旅順要塞に抜刀して突撃していって玉碎した三千名の白檣隊の将兵や大東亜戦争で爆弾を抱えて敵艦目掛けて突っ込んでいった特攻隊の若者の勇気と祖国への愛を、社会において教育において賞賛し追悼しているであろうか。

イスラエルでは、賞賛し追悼している。テル・ハイのトルンペルドールの墓の

前には、「國のために死ぬことはよいことだ」と刻まれている。

私が滞在したイスラエルの四月十九日の戦没者記念日には、二昼夜にわたって全戦没者の名が延々とラジオで読み上げられていた。そして、記念日の正午、サイレンが鳴り全イスラエルが黙祷を捧げた。私が乗っていたバスの運転手は、信号でバスを停止させ、運転席から出て起立した。交差点のなかでは、警官と横断中の歩行者が直立して黙祷していた。高速道路でも車を道路脇に停車させ車から出て黙祷すると聞いた。

しかも、イスラエルが追悼しているのは、二十世紀の戦没者に限らない。紀元七十三年、死海の東のマサダの砦に立て籠つてローマ軍と三年間戦つた末に玉碎した千名のユダヤ人をイスラエルは今も甦らせて賞賛している。

イスラエル軍新兵の入隊式は約二千年前の玉碎の地であるマサダの砦で行われ

る。新兵は右手に自動小銃を持ち、左手に旧約聖書を持って「マサダは二度と陥落しない」と誓うのである。これが六十五年にわたりイスラエルが中東戦争を勝ち抜いてきた理由である。これがなければ、イスラエルは既に存在していない。そこでまた問うが、日本は英靈を追悼しているのか。総理大臣は、靖国神社に何故参拝できないのか。よって、このままで日本は存続できるのか。

エリ・エリヤフ・コーエン大使が、本書でトルンペルドールを日本の読者に提供する理由が如何に切実か理解していただきたい。

即ち、このまま戦後の惰性に流れるが如く推移すれば我が日本は存続できないのだ。

よつて、今こそイスラエルとトルンペルドールに学ばねばならない。これは即ち、明治の日本に回帰することである。我々の先祖の奮闘努力を思い出し先祖を顕彰し追悼することである。

イスラエルと我が国は、人知では直ちに察知できない深い縁で結ばれている。それは、我々日本人が、戦前と戦後の連続性を取り戻せば見えてくる。連続性を取り戻すとは我々の歴史を取り戻すことであり、それは即ち我々が自分自身を取

り戻すことである。

最後に、私がエルサレムで会ったイスラエル人のご夫婦を紹介する。婦人は私に、日本とイスラエルの隠れた絆を生き証人として話され、ご亭主は日本が何をイスラエルから学ぶべきかを示唆してくれた。

三年前に、エルサレムで、モサド（イスラエル諜報特務庁）元長官のナホム・アドモニ氏と奥さんのニーナさんに会った。

ニーナさんは日本人である私に言つた。

「七十年前、七歳の時、両親に連れられてナチスから逃れてヨーロッパからシベリアを横断し船に乗つて敦賀に着いた。そして、しばらく神戸で過ごした。その時の日本人達が、私達ユダヤ人に大変親切にしてくれたことを忘れることができない」と。話している綺麗なニーナさんの青い目に涙がにじんでいた。

七十年前、ナチスが支配するヨーロッパからシベリアと満州の境である満州里に辿り着いた多数のユダヤ人たちを、ナチスドイツからの抗議を拒絶して特別列車を仕立てて満州から敦賀に送つたのは、関東軍参謀長東條英機陸軍中将であった。そのなかに、七歳のニーナさんもいたのである。七歳だったニーナさんは、敦

賀でも神戸でも、日本人が親切だったことをよく覚えていた。

ボーランドからの六千名のユダヤ避難民に、リトニアの領事館にいた外交官杉原千畝がビザを発行して助けたことはよく知られている。しかし、杉原千畝のみならず軍人においても関東軍参謀長東條中将以外に、関東軍特務機関長樋口季一郎少将は部下に指示してシベリヤから満州に続々と辿り着いた二万のユダヤ難民に満州通過の便宜を供与して救出している。これは日本軍が組織としてユダヤ人を救つたということである。

我が国が武士道にいう武士の情を重んじ、満州においては五族協和を、大東亜共同宣言においては人種差別撤廃と諸民族共栄の理想を掲げたことは、口先だけのことではなく実践を伴つていたのである。

しかし、戦後は、この日本の人道を重んじた勇気ある実践は故意に封印された。我が国の「敗戦（戦後）」から利得を得て快適に生きる勢力は、戦前の我が国が「軍国主義」でなければ都合が悪いからである。

この我が国の戦前の実践を、遙かイスラエルのエルサレムでニーナさんが教えてくれた。

モサド長官であつた二一ナさんの夫ナホム・アドモニ氏からは、「拉致被害者を救出するために日本政府は何をしているか」と質問された。答えに窮した。いや、答えられなかつた。

イスラエルは、ユダヤ人に対してテロを行つた者を地球の果てまで追いかけていつて必ず復讐する。従つて、イスラエル人を拉致するテロリストはいない。

答えに窮した私に、彼は言つた。「交換するのも一つの手だ。以前、戦争中、我々は、シリアの将軍連中が前線を視察するという情報を掴んだ。そして彼らを待ち伏せて捕まえ、捕虜になつていた多くのイスラエル軍兵士と交換した」。

その説明を聞いているとき、かつて我が国に偽造旅券で入国しようとして身柄を拘束した北朝鮮の独裁者金正日の息子金正男を、さつさと旅客機のファーストクラスに乗せて帰してしまつた日本政府と特にその時の外務大臣の顔を思い出した。私と同志が、独裁者の息子と拉致被害者の交換を日本政府に迫ろうと動き出したとき、既にその息子は旅客機に乗つていたのだ。しかし、このことは恥ずかしくて言わなかつた。

一九七二年九月、ミュンヘンオリンピックに参加したイスラエル選手とコーチ

が、レバノンに拠点を置くブラックセプテンバーというテロリストの人質になり十一人全員が殺された。そのテロに対して、七十歳代後半の女性闘士であるイスラエル首相のゴルダ・メイヤは、「神の怒り作戦」を発動する。それは、パレスチナ過激派のキャンプの爆撃と犯人であるブラックセプテンバー全員の殺害である。空爆は直ちに実施され、二百名のパレスチナ解放機構のメンバーが殺された。そして、モサドによるブラックセプテンバーへの復讐は数年にわたつて粘り強く進められテロの頭目を殺して終了する。以後、イスラエルに対するこの種の事件は起きていない。

本年（平成二十五年）一月、アルジェリアのイナメナスで十名の日本人がテロリストに殺害されたとき、私はイスラエルのゴルダ・メイヤ首相を思い出した。彼女なら如何なる決断をするかと。

そして、その殺害から数日後に行われる安倍総理の所信表明演説に注目した。しかし、安倍総理からは、テロリストに対して、ゴルダ・メイヤの如き復讐をおわす発言は出なかつたのである。

この日本の首相の発言を、テロリストの側から観れば、彼らは如何に受け取つ

たであろうか。日本人は何のリスクもなくテロの対象にできると判断したと思う。従つて、日本人は、これからもテロの対象にされる。

このように、いま我が国がイスラエルから学ぶべきことは、国家を維持し領土と国民を守る厳しさである。この厳しさを学ぶか学ばないかで、例えばイナメナスの国民の命が守られるのか否か、拉致された日本人が解放されるか否か、尖閣が守られるか否か、そして遂には、我が国が日本として存続できるか否か、が決まる。

その我らが学ぶべきイスラエルの建国の英雄、かつて旅順で片腕になつても勇敢に日本軍と戦い、その後大阪の浜寺口シア兵捕虜収容所にいた片腕の英雄、ヨセフ・トルンペルドールを、本書によつて、身近に生き生きと我々に紹介してくれた元イスラエル駐日大使であり日本武道の達人であるエリ・エリヤフ・コーエン氏に心より感謝する。

目 次

第一章 ユダヤの誇り

33

「國のために死ぬことはよいことだ」 ユダヤ人としての自覚と誇りをもつた父 『ヘデル』の強い影響	34
トルストイに傾倒 シオニズム運動と出会う ロシア軍に入隊 前線への配属を志願	43 45 46 49
「ユダヤ人っぽくないユダヤ人」	54

序文 ——この本はユダヤ魂、日本魂を教えてくれる

衆議院議員 西村眞悟

3

プロローグ 27

第二章 片腕の兵士

「ユダヤ人っぽくないユダヤ人」

54